

2025/9/28 「ベタニヤのおみやげ」 ルカ 24:50-53 さ 128 せ 595 (633)

2018年8月19日から7年間。ついに、この日を迎えました。ルカの講解は、あなたの信仰生活にとって、どのような恵みをもたらしたのでしょうか。ルカによる福音書の終わりは、使徒言行録の始まりです。主の恵みを数え、新たな喜びをいただきましょう。

最期のお別れ

キリストの昇天・高挙は、弟子たちが、地上で、肉眼でイエス様を見ることができた最期の機会でした。使徒言行録では、もっと詳しくこの情景が記されていますが、ここでは簡潔に述べられています。復活後の40日も、いよいよ終わったのです。イエス様の「ご最期」は、棺桶の蓋が閉まり、火葬場の扉が閉じるような瞬間ではありません。むしろ、駅のホームで見送るように、飛行機のフライトのように、大空に向かって、主イエスも、見送る弟子たちも、両手をあげて別れの時を持ったのです。

ベタニヤは、イエス様の愛した三姉弟が住む場所です。そして、その郊外には、オリーブ畑が広がっていました。まさしくそこは、十字架にかかる前に「ゲッセマネの祈り」を捧げた、その場所だったのです。もっとも苦しみ悶えて祈られた暗黒の場所が、昇天の日、オリーブの木々が太陽の光を浴びて、澄み渡る空になっていたことでしょう。

イエス様は「祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた」と記されています。残された人たちが受けた祝福は、何にも代え難い、素晴らしい置き土産でした。小松川教会の原登牧師は、「毎週の説教の中で、何か一つでも、心に残ったことを、大事におみやげにきなさい」と言われました。おみやげは、嬉しい時もあれば、忘れる時もあります。祝祷を、信仰をもって受け取るとき、その人に実現していく天の恵みになります。

喜びの始まり

イエス様の地上の別れが、私たちの人間同士の別れと、決定的に違う点がひとつあります。それは、大喜びでそこを去った、ということです。そして、その道は新しい始まりとなるエルサレムに向かっていきました。親しい人を天に送る事も、それはある意味新しい始まりと言えるでしょう。しかし、大喜びという心境には絶対になれません。

イエス様が与えられたお土産を、弟子たちは、大切に味わったと言えるでしょう。その本質は何かというと、地上だけでなく、天上にも友がいるという信仰の確信でした。「もう会えない」という悲しみよりも、「新しい世界」を確信したことが、心のそこから喜びとなって、湧いてきたのです。その勇気は、彼らをあれだけ恐れていたエルサレムへ向かわせ、そして10日後のペンテコステの日に、「いつも共におられる」という聖霊の満たしを体験する場所に変えていきました。

ルカは、エルサレム神殿で香を焚くゼカリヤの喜びと賛美で物語を始めます。そして、弟子たちのエルサレムでの喜びと賛美で締めくくり、新たな喜びと賛美へと続きます。